横浜市立大学論叢人文科学系列　2013：Vol.65 No.1

済州島4･3紀行
―現場探訪によって4･3事件を考える―（下）

倉　持　和　雄

目　次

はじめに
1　済州島4･3事件とは
2　済州島4･3紀行の旅程
3　済州島4･3事件の起点＝3･1節発砲事件の現場：観徳亭
4　4・28平和会談の現場：九億里国民学校跡地
5　失われた村：東広里ムドゥンイワ、細花里タランシ、禾北里コヌル洞
以上、第64巻第3号掲載
以下、本号掲載
(1) 東広里ムドゥンイワ
(2) 細花里タランシ
(3) 禾北里コヌル洞
6　最大の虐殺事件：朝天邑北村里ノブンスンイ
7　右翼団体西北青年会による虐殺：城山浦トジンモク
8　朝鮮戦争時の予備検束による虐殺：ソダルオルムと百祖一孫之地、済州飛行場
(1) ソダルオルムと百祖一孫之地
(2) 済州飛行場
おわりに

5　失われた村：東広里ムドゥンイワ、細花里タランシ、禾北里コヌル洞

(1) 東広里ムドゥンイワ

10月11日、9時過ぎにホテルを出て、最初の訪問地東広里ムドゥンイワ

に向かった。済州市から南西方向に走る西部観光道路を渋滞もなく快適に走った。道路はゆるやかに登っていて、高度が上がるに従って、車窓から済州島の西部地域を見渡せた。遠くには広がる海、島内には済州島特有のオルム（寄生火山）をいくつも見ることができた。東広里ムドゥンイワには45分ほどで着いた。バスを降りると天気がよくて日差しはあるのだが、冷たい風が強く身震いするほどであった。済州島は風が強いところとよく言われるのだが、とくに南西部のこの辺りは格別、風が強いとの説明であった[1]。出発前、東広里ムドゥンイワは奥まった村で、バスが行けるところから結構、歩いて行かねばならないのかと想像していたのだが、バスを降りると、なんとそこは、すぐに村の入口であった。村の入口に「失われた村」の碑が建っていた（第８図）。

第８図　東広里ムドゥンイワの入り口と石碑（2012年10月11日撮影）

1　済州島は三多の島と言われるが、その三つとは風、石、女を指す。済州南西部で風がとくに強いという話しの際に、金所長はダジャレを言われた。摹瑟浦（南西部の町、모슬포と書いてモスルポと発音する）について、「모슬포（モスルポ）は風が強くて못살포（モサルポ）」だと言った。못살（モサル）とは「生きられない」「生活できない」という意味である。

村の入口にある碑の横で金所長からまず説明を聞き、その後、小道伝いに歩いて村のなかの見学をした。ムドゥンイワは東広里の５つの自然部落のうちの一つである。東広里の自然部落のうち再建されたのは１つだけで、ムドゥンイワを含め４つの自然部落のすべてが失われた村になっている。東広里は300年もの古い歴史を有する村で、植民地時代の1939年にムドゥンイワに2年制の東広里簡易学校が建てられ、この地域一帯の教育の中心地でもあった[2]。すでに述べたように済州島内の失われた村のなかでムドゥンイワは規模が最大で当時、130戸余りの家があり、恐らく600人余りが住んでいただろうという。

第９図　東広里ムドゥンイワの住居跡地（2012年10月11日撮影）

さて入り口から村に少し入っていくと、第９図の写真のように現在は、ソバの畑になっている所があった。ここを眺めただけでは、ソバの白い花

2　ムドゥンイワ以外の自然部落は、조수궤（チョスゲ、10余戸）、사장밧（サジャンバ、3戸）、간장리（カンジャンニ、10余戸）、삼밧구석（サムバクソ、45戸）である（済州4·3平和財団(2010)、95ページ）。石碑によるとカンジャンニだけが再建され、ムドゥニワの住民もそこに移り住んでいる人がいるとのことであった。

が一面に咲いたすてきな畑としか思えない。説明によれば、かつて農家は住居の裏によく竹藪をつくっていたので、竹藪があることで、そこが住居跡であることが分かるという。ただ竹藪といっても日本でよく見られる孟宗竹の竹林のようなものではなく、竹は太くなく、背丈もそんなに高くないので、やや太い笹藪に近い感じを受けた。さらに村のなかに入っていくと、住居の周りを囲ったと思われる低い石垣を見ることもできた。先に紹介した写真集『済州島4·3　失われた村』に「ムドゥンイワはいまも村の跡が比較的よく残っている。」とあった。しかし、素人にとっては、正直言って、もし説明を聞かなければ、畑地か空き地のようにしか見えない風景であった。天気もよかったのでのどかな田園の情緒が漂い、過去にここで悲惨な出来事があったとは思えないような場所であった。

ムドゥンイワの悲劇は波状的にあった。1948年11月15日に、討伐隊がやってきて村を包囲し、住民を集めたあと、村の有力者を呼び出し、二列に立たせて彼らに向けて発砲した。11名のうち10名が絶命した。このあと、11月21日に再びやってきた時、疎開しようとしていた一家を見つけて殺害した後、ムドゥンイワを完全に焼き払ってしまった[3]。一体、何故、有無を言わせず、一方的に住民を殺害し、この村を焼き払ってしまったのだろうか。一つの理由は、疎開令が出ていたのに、村の住民がこれに従わなかったからということが言えるが、住民たちは疎開令が出ていたことを知らなかった可能性がある[4]。しかし、そんな事情があることも顧みずに無慈悲に住民たちを殺害したもう一つの理由として考えられるのは、この村が以前から警察や軍からすでに目を付けられていたことである。4·3事件勃発前の1947年8月8日、米軍政下で麦の供出に来た役人を村の青年たちが袋だたきにするという事件があったし、1948年5月10日の単独選挙に村人のほとんどが投票に参加しなかった[5]。こうした事実からこの村は、当

3　済州4·3第50周年学術・文化事業推進委員会編（1998）、81～84ページ。
4　同上、83ページ。
5　同上、71～78ページ。

局に反抗的であり、武装隊に協力的だとみなされたものと思われる。4·3事件においては、このようにある村が武装隊に通じているとの先入観が討伐作戦を過酷にしていることがしばしば見られる。東広里はその典型な事例だと言えるだろう。

さて、ムドゥンイワはじめ東広里の住民たちは、その後、討伐隊を逃れ、済州島の各所に存在する地下窟に隠れ住みながら転々とした。あるとき討伐隊は、捕まえた村の老人を威嚇して、村人が隠れている地下窟を案内させ、そこに隠れていた村人を殺害し、その近くで待ち伏せした。遺体を収容に村人がやって来るだろうと考えてのことである。翌日、予想通りにやって来た村人をさらに殺害するという残酷な事件もあった。このとき殺害された村人はほとんどが老人と婦女子であったという[6]。その後も生き残った東広里の人々は、討伐隊を逃れて山野をさ迷い、地下窟に隠れて生活していたが、これらも討伐隊に発見され、最終的にほとんどの住民が討伐隊に捕らえられてしまった[7]。捕まった住民たちは、捕まえた討伐隊が所属する地区にそれぞれ連行され、その地区の収容施設にしばらく収容されたが、多くはその後、結局、殺害された[8]。

東広里の人々のなかで安徳面の討伐隊に捕まった人々は、和順支署に連行された後、西帰浦に移送され、西帰浦正房瀑布で1949年1月22日に殺害された[9]。済州島には三大瀑布と呼ばれる滝があって、それぞれが美しい滝であり、人気の観光スポットになっている[10]。正房瀑布はこの一つであり、

6　同上、86～87ページ。これについては、文京洙（2008）も134ページで言及している。

7　隠れ住んだ地下窟の中で有名な地下窟が큰넓궤（クンノルケ）と呼ばれるものである。「クンノル」は「大きくて広い」という意味だが、その通りに規模の大きい地下窟で東広里の住民120人が2カ月ほど隠れ住んでいた。しかし、ここも1949年はじめに討伐隊に発見されてしまった。現在、ここは多くの4·3紀行者が訪れるところとなっているという（済州4·3研究所（2011a）、70ページ）。今回、わたしたちは残念ながらここを見学することはできなかった。

8　詳細については、同上、86～98ページ。

9　同上、96～98ページ。

10　三大瀑布とは、正房瀑布のほか、天地淵瀑布、天帝淵瀑布を指す。いずれも西帰浦周辺にある。

海に流れ落ちる、珍しい滝である（第10図）。西帰浦正房瀑布にはこの日の夕方、この日最後の旅程として訪れた。海岸に降りて、正房瀑布を見上げながら金所長の説明を聞いた。虐殺は滝の上で行われ遺体は滝壺に転落し、その後、海に流れ出して結局、遺体を収容することはできなかったそうである。滝壺は文字通り血の海となったという。東広里の犠牲者200余名のうち遺体を収容できたのは半分ほどで、遺体を見つけられなかった人のなかには、やむなく遺体のない墓（韓国語で혼묘、ホッミョ）を造成したという[11]。

第10図　東広里の人々が虐殺された正房瀑布（2012年11月11日撮影）

10月11日の行程で最初に見学した東広里と最後に訪れた正房瀑布は距離的にもかなり離れているのだが、4·3事件としては、ひとつのつながった事件の現場なのであった。

(2) 細花里タランシ

海外FW 4日目、11月12日の午後、昼食を世界遺産の城山日出峰の近

11　同上、112～113ページ。

くで済ませたあと、細花里タランシに向かった。タランシは、済州島のなかでももっとも高度のある村の一つであった。タランシに近づくと、ここからは済州島の東部一帯が見渡せ、先ほど出発した城山日出峰を遠くに見ることができた。この日も好天で、しかも前日に比べるとずっと暖かく、歩くと少々、汗ばむくらいであった。

タランシは4·3事件との関連では、すでに紹介したタランシ窟の発見で脚光を浴び、有名となった。それ以外に、済州島のなかに360余箇あるオルム（寄生火山）のなかで規模も大きく、美しいかたちをしているタランシオルムがあることでも有名である[12]。わたしたちは、タランシオルムを下から見上げただけであるが、時間的余裕があったらぜひ登ってみたいような山である。きっと頂上に登れば、済州島の東部全体がもっとよく見渡せるのではないかと思う。金所長によれば、頂上には下から見上げた高さ

第11図　タランシ村のヒノキと石碑（2012年11月12日）

12　タランシオルムの登り口の事務所にあったパンフレットに、タランシオルムについて「海抜高度382メートル、比高200メートルである噴石丘（cinder cone, scoria cone）で、済州島に分布する360余箇のオルムのなかでオルムのもつ規模、傾斜、噴火口など火山地形の特徴をよく現している代表的なオルムである」と説明がある。

と同じくらいの深さの噴火口があるとのことであった。

タランシ村はタランシオルムのすぐ麓にあり、村の中心にあったといわれるエノキがいまも残っていて、その横に失われた村を示す石碑が建っている。第11図がその写真であるが、左奥に見える山がタランシオルムである。

すでに述べたように、タランシの住民は早くに自ら疎開していたので住民に人命被害はなかった。しかし、村人はいなくなったが、馬を放牧して育成するために周辺の地からこの地に出入りする人々がいた。そんな人々が討伐隊と出くわして犠牲に会うことあった。こんな悲話を金所長から聞いた。ある文字も読めない無学の馬追の男が、このエノキの下で武装隊の撒いたビラの束を見つけ、それが武装隊のビラであることも分からず、たばこの巻き紙にしようと持っていた。ちょうどそこへ討伐隊がやってきて、彼が武装隊のビラを持っていたため暴徒とみなされ、その場で無惨にも殺害されてしまったのだという[13]。のどかで平和そうに見える第11図のエノキの下で、4·3事件当時、そんな悲劇があったのである。

ところでタランシは、早くに住民が疎開したので、村が焼き討ちにあうことはなかったと思っていたが、石碑の説明を見ると、この村もすべて焼かれたと書かれていた。すでに村人がいない空き家を燃やしてしまったのだろうか。タランシオルムは眺望がよいため、武装隊が討伐隊の移動状況などを把握することができ、武装隊の本拠地の一つであったという[14]。武装隊の活動を妨害するため、武装隊の隠れ家になる可能性のあるタランシの家屋を焼き払ってしまったのだろう。

さてこのエノキのある場所から東南方向に300メートル行ったところにタランシ窟がある。この日はすでに述べたように、多少、暖かく、風もない穏やかな好天であった。間近には真っ青な空に映えるタランシオルムを

13　この悲話については、済州4·3第50周年学術・文化事業推進委員会編（1998）、297ページにも記されている。これによるとエノキの下によい水場があったとのことである。このため馬を追ってタランシ村に出入りしていたのであろう。

14　同上、285～286ページ。

眺め、遠くに済州島東部の海岸地帯を遠望しながらタランシ窟に至るまでの野道を歩いた。まるでピクニックに来たかのようであった。

タランシ窟の現場、そこは野原のなかであった。金所長が案内してくれなければ、そこに地下窟があるとはとても思えない、ただの野原にしか見えないところであった。第12図がタランシ窟現場の写真である（後方に見えるのがタランシオルムである）。野原に石が数カ所、露出していて、その石に隙間が見えたが、それはほんの小さな隙間でそこに地下窟があるとはとても思えなかった。

第12図　タランシ窟の現場（2012年10月12日撮影）

このタランシ窟で起きた悲劇の概要はこうである。1948年12月18日、討伐隊は地下窟に住民が隠れていることを発見した。金所長によると少し前の時期にこの場所よりずっと麓の旧左面細花里に対して武装隊の攻撃があり、村人が多数殺害される事件があったという[15]。この報復のため武装

15　1948 年 12 月 3 日、武装隊が細花里を襲撃して一般の村人など 48 人が殺害された（済民日報四・三取材班（2000）、42 ～ 44 ページ）。武装隊が村を襲撃して一般住民まで殺害した事例は、細花里以外に表善面城邑里、南元面南元里など数少ない（同 43 ページ）。

隊の本拠地と目されるタランシオルム周辺が討伐隊によって徹底捜索され、発見されたのだろう。討伐隊は投降を呼びかけたが、窟内の人々はこれに応じなかった。このため討伐隊は窟の入口に火を燃やして窟内に煙を送り込んだ。結局、窟内の人々は全員窒息死した。この悲惨な虐殺事件の現場が、事件後、43年以上経た1992年4月、発見された。女性3人と子ども1人を含む犠牲者11人の遺骨が、窟内でそのまま発見されたのである。そしてその窟で生活していたことを彷彿とさせる甕、釜、食器、しびんなど生活用品がそのまま残されていた。地下窟から武器らしきものは見つかっておらず、彼らはただの避難民であったと推測される[16]。この発見が報道されると韓国の全国民に衝撃を与えた。この発見が、その後、4·3事件の真相究明を推進する契機になったということは、すでに述べた通りである。

このタランシ窟は、２日前（10月10日）に見学した済州4·3公園内の平和記念館に再現されて展示されている。その写真が第13図である。

第13図　タランシ窟内部再現（済州4·3平和記念館、2012年11月10日撮影）

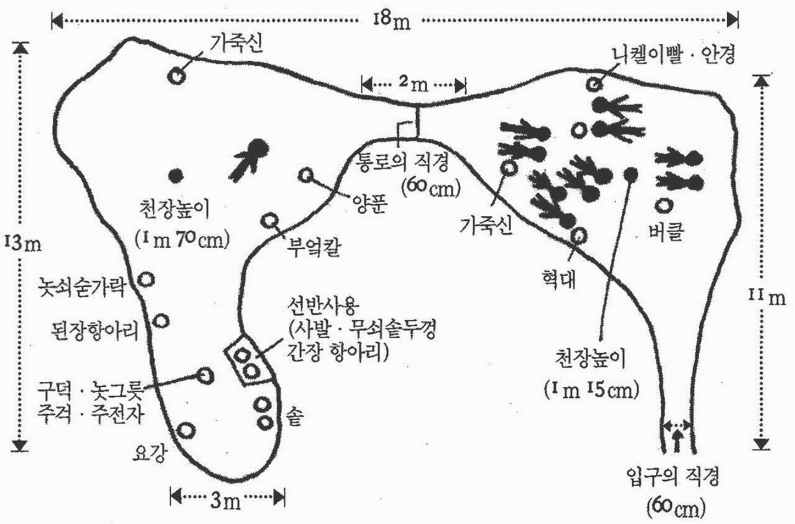
済州4·3平和記念館での説明によると、これは発見された時の現場をそのまま再現したとのことである。右側の写真から分かるように、発見当時、遺骨はきちんと上を向いて並んでいた。まるで静かに死を迎えた人々のようにさえ見える。燻られ、苦しんで窒息死した人々の姿にはとても見えな

16　金昌厚所長の説明と現場の案内板および済州４・３第50周年学術・文化事業推進委員会編（1998）、313ページを参照。

い。その謎の原因は以下のような事実があったからである。虐殺事件直後、実は武装隊の指示で終達里のチェ氏などが洞窟内に入り、遺体を整頓していたのである。後日のチェ氏の証言によると、このとき遺体は窟外に2体、窟内に約20体あったという。地下窟内の人々は、目、鼻、耳から血を出し、苦しさのためか頭を地面に突っ込むようにして死んでいたという[17]。実はタランシ窟の虐殺事件はすぐに周辺の人々には知られ、一部の遺体は、遺族によって別の場所に運ばれ埋葬されていた[18]。しかし、11体の遺体はそのまま地下窟のなかに43年以上も捨て置かれたままになったのである。チェ氏はじめ、この虐殺現場を知る者たちも、その後の韓国の政治社会状況のなかで沈黙を守らざるを得なかったのである。

第14図は、発見された当時の地下窟内部の実測図である。この図に示されているように地下窟の入口は直径が60cmほどで非常に狭く、身をよじっ

第14図　タランシ窟発見当時の様子



出所：済州4·3第50周年学術・文化事業推進委員会編『済州4·3遺跡地紀行』（学民社、1998年）、313ページ

17　同上、313ページ。
18　同上、301ページ。

てやっと入り込めるほどしかない。しばらく行くとやや広い空間がある。ここの天井の高さは1m15cmで、歩くのに屈まねばならなかったであろう。この空間に10人の遺骨が並んで横たわっていたのである。さらに先を行くと再び直径60cmしかない狭い通路を経てもう一つのやや広い空間に至る。ここは天井の高さが1m70cmほどで、ここだとやっと真っ直ぐ立つことができたかもしれない。ここにもう一体の遺骨が残されていた。この空間にはすでに述べたが、甕、釜、食器などの生活用品が残されていた。このことから、人々はここを台所として使用していたと考えられる。

ところで金昌厚所長は、タランシ窟がどのようにして発見されたと思うか、と学生たちに質問した。すでに述べたように、実際、現場に来てみても、この野原のまんなかに地下窟があるとはとても思えない所である。つまり、タランシ窟は非常に見つかりにくい地下窟だったといえる。金所長の質問に対する学生たちの回答は、地下窟で人々が煮炊きをしていて、その煙が入口から出て、それを討伐隊に見つけられたのではないか、というものであった。ありえそうな推測だと思ったが、金所長の答えは「ノー」であった。金所長によるとタランシ窟は、狭い地下窟のため用便を窟内でする空間がなく、用便は外の様子を見計らって窟周辺の野原でしていたとのことである。しびんが発見されていることから小用は窟内ですることもあったと思われるが、基本的に窟の外で用便をせざるをえなかった[19]。このために窟の周辺に人々はその痕跡を残していたのである。捜索に習熟した討伐隊は、この用便の痕跡を見つけてその近くに人が隠れている場所があるに違いないと徹底した捜索をしたのだろう。結局、見つかりにくいこの地下窟を見つけ、そのなかに人々がいることを突き止めたというのである。

1992年4月、43年以上の時を経て、タランシ窟で4·3事件の生々しい現場が発見された。民主化が実現して、これまで沈黙していた目撃者が口を

19　これに関連して、金所長の説明では、東広里の人々が隠れ住んだクンノルケは規模が大きい地下窟であったため窟のなかに用便のための空間を確保していたとのことである。

開けるようになったからである。しかし、民主化がなったとはいえ、まだ当時は盧泰愚政権の時代であった。依然として権威主義時代の慣性が働いていたのであろうか。遺族たちは墳墓の造成を望んだが、ある種の圧力により11体の遺骨は火葬されてしまった。そして遺骨を灰にして海に撒くというかたちでの葬礼が1992年5月15日に急遽行われてしまった。遺骨と遺品を保存しようという島民の世論は黙殺され、ある時期まで洞窟は封鎖された[20]。旧左面邑長・旧左面派出所長名義で「許可無く無断の立ち入りを禁ず」との立て看板がしばらくの間、設置されていたのである[21]。当局は、4·3事件について事を荒立てることを望まなかったのである。

しかし、その後、4·3真相究明の声が高まり、2000年に4·3特別法が成立した。遺骨を保存する願いは叶わなかったが、タランシ窟の内部の様子は、済州4·3平和記念館に再現され展示されることになった。わたしたちは現場を訪問して、展示された窟内の光景がこの足下にあることを想像することができた。現場を立ち去る直前、金所長から遺品である生活用品などは、現在も窟のなかにそのまま残されているとの説明を受けた。それを聞いて、ふと4·3当時にタイムスリップするような感覚にとらわれた。地下窟に隠れた人々は、タランシ村の人々ではなく、海寄りの細花里と終達里の人々であった。何故、彼らは地元にとどまらず、わざわざ討伐隊が活動する中山間地に逃げてきたのだろうか？　そんなことを考えながら、改めて窟の入口の穴をのぞき込んでみたが、そこは依然として、ただの隙間のようでしかなかった。

(3) 禾北里コヌル洞

10月12日、最後の訪問場所、禾北里コヌル洞にやってきた。すでに17時を回っていた。日本であったら、この時期の17時過ぎは、もうすっかり暗いであろう。しかし、日本と同じ時刻でありながら、はるか西に位置す

20　同上、316ページ。
21　同上、300ページ。

る済州島では、ほんのすこし暗くなりかけた程度であった。

禾北里コヌル洞は現在、済州市に属しており、済州市街地の東側に隣接する場所である。禾北川という川の最下流沿いの海に面した村である。禾北川は海に流れ込むところで二手に分かれているため、コヌル洞は禾北川を境にして３つの自然部落に別れている。禾北川の東側支流の東部分をパッカテコヌル（바깥 パッカテとは「外」の意)、禾北川の二つの支流に挟まれたところをカウンデコヌル（가운데 カウンデとは「間」の意)、そして禾北川の西側支流の西をアンコヌル（안 アンとは「中」とか「奥」の意）と呼んでいる。4･3事件以前には、パッカテコヌルには28戸、カウンデコヌルには17戸、アンコヌルには22戸の住居があった[22]。失われた村となったのは、このうちアンコヌルである。

第15図　コヌル洞アンコヌルの光景（2012年10月12日撮影）

22　戸数については、現場の案内板を参照。なおパッカテコヌルという呼び方は金所長の説明によるもので案内板ではパッコヌル（밧곤을）と記してある（パッはパッカテと同意と思われる)。

第15図の写真は、アンコヌルの少し上から東側を眺めた光景である。正面に土手が見えるがその手前に禾北川が流れている。川の水が左上部中ほどに少しだけ見える。左上部に見えるのは海である。土手の向こう側はカウンデコヌルになる。わたしたちが訪ねた時、アンコヌルの住居跡はまるでコスモスのお花畑のようになっていた。前述のように、ここは済州市の市街地と隣接する場所であるためか、済州市民のジョギングコースの一部になっている。わたしたちが見学している最中にも、すぐ横をランナーが何人も走り過ぎていった。勝手な想像だが、アンコヌルのコスモスは、ジョギングやウォーキングする市民たちを楽しませるために植えたのかも知れない。

写真を見て分かるように、アンコヌルには住居の境となる石垣がくっきりと残っている。すでに見た東広里も住居跡が比較的よく残っているとは言うが、説明を聞かなければ、素人目には畑のようにしか見えなかったし、タランシ村はまったくの野原でしかなかった。しかし、アンコヌルの場合は、ここが住居跡であったことが一見して分かる。金昌厚所長は失われた村としてもっともその痕跡をよく残す所であるのできちんと保存しなければならないと力説されていた。禾北川は済州島のほかの川と同様、通常は枯れ川で、水量はほとんどないのだが、まれに大雨があると一挙に水量が増す。2007年に大雨で禾北川が溢れ、洪水になったことがあったという。このときアンコヌル側の川岸が急流で削られたそうである。再び禾北川が同じような洪水になると、アンコヌルの一部が破壊される危険性があるという。このためここを市が買収して早く護岸などアンコヌル保存の措置をとる必要があると所長は主張していた。

さてこの村の悲劇は1949年1月4日と5日に起こった。1月4日の午後3～4時頃、第2連隊1個小隊が村を包囲した。そして村人全員を集め、若者10余人を海岸に連行し、そこで殺害した。さらにアンコヌルとカウンデコヌルに火を付けて全焼させた。翌日、近くの禾北国民学校に行っていた住民の一部を連行して村の東側の海岸モサルプルで殺害した。そしてパッ

カテコヌルを全焼させた。こうしてコヌル洞の３つの自然部落すべてが焼き尽くされてしまったのである[23]。しかし、この海辺の村が何故、焦土化されてしまったのであろうか？　焦土化作戦の対象地域は海岸から５キロより内陸部の中山間地帯ではなかったのか。焦土化作戦地域でないコヌル洞がどうして焼き討ちに遭い、そして失われた村となってしまったのであろうか？

第16図　アンコヌルを東側より遠望（2012年10月12日撮影）

いくつかの証言からこの事件の原因は以下のように推定されている。コヌル洞焼き討ち事件の当日の午前中か、あるいは前日に近辺道路で武装隊が軍の車を襲撃するという事件があった。このときの交戦中、武装隊の一人がコヌル洞の方に逃げ込むのを軍の兵士が目撃した。このため軍は、コヌル洞の住民の中に武装隊員がいる、あるいは武装隊員をかくまっている

23　現場の案内板による。なお、案内板では最初の日付を１月５日と書いていたが、次の日と書きながら再び１月５日と記しているので、最初の１月５日は、１月４日の間違いであろう。なお「コヌル洞」という別の石碑には、「１月４日朝９時頃～」とある。事実関係について、現場の案内板、石碑で若干、齟齬が見られる。

と考え、武装隊への報復としてコヌル洞を襲撃したのだと考えられる[24]。しかし、軍は武装隊員かどうかをきちんと確かめることもなく、多数の若者をはじめとする住民を連行して有無をいわさず殺害してしまった。さらに村のすべてを焼き尽くしてしまった。復讐心に燃えた報復行為で、ひとたび武装隊との関与を疑われてしまうと無関係の人々まで巻きこんだ殺害が行われるのである。4·3事件における犠牲の典型的なケースである。後に見る済州島最大の虐殺といわれる北村里の虐殺事件もそうである。

焦土化作戦の対象地域でないコヌル洞の焼き討ちと住民の虐殺は、軍の報復としての襲撃の結果なのである。見学を終えて遠くから振り返った時、夕暮れが迫ったアンコヌルの遠望は何か悲しげに見えた（第16図）。

さて「失われた村」についての最後に、何故、これらの村はその後、再建されることがなかったのだろうか、という疑問が生ずる。焦土化作戦では多くの村人が犠牲になった。しかし、犠牲を免れた村人は何故、もとの村に戻って村を再建しなかったのだろうか？　このことを金昌厚所長に質問してみた。ちょうど東広里ムドゥンイワでの見学の途上であったので、この村についての回答であった。東広里ムドゥンイワの場合、村人は再建された近くの村（カンジャンニ）に住むようになっていて、そこからムドゥンイワに通って農作業ができているとの話しであった。ムドゥンイワの村人が、自分の村を再建しないでも生活を維持できるようになったということは分かったが、それだけでは何故、ムドゥンイワの人々が自分たちの村を再建しなかったかの積極的な答えにはならない。

もともと中山間村の場合、土地条件は必ずしもよいとはいえなかった。こういう中山間村の住民たち、とりわけ若年層は、その後、高度成長時代が訪れると、都市部へ流出していき、それにより村が過疎化することは普遍的に見られる現象である。しかし、当初から村が打ち捨てられたまま、もとの住民が戻らず、結局、失われた村のままとなっているのは、別の原

24　前掲、済州4·3第50周年学術・文化事業推進委員会編（1998）、189ページ。

因があるはずである。恐らく、個別の村ごとにそれぞれ個別の理由があるように思われる。これまでの「失われた村」についての研究は、その村がいかにして失われたかを明らかにしてきた。しかし、今後の研究においては、それだけでなく、何故、その後も失われたままになっているのか、換言すれば、何故、村が再建されなかったのかを究明することが必要だと思われる。

６　最大の虐殺事件：朝天邑北村里ノブンスンイ

済州島4･3事件で最大規模の虐殺とされているのが、1949年1月17日、朝天面北村里で起こった事件である。すぐ前に述べたコヌル洞への軍の襲撃と同じく、北村里の犠牲も報復を目的とした軍の襲撃によるものであった。この事件の経緯はこうである[25]。

1949年1月17日の朝、細花里に駐屯していた第2連隊3大隊の中隊一部の兵力が大隊本部のある咸徳里に移動途中、北村里のノブンスンイで武装隊の奇襲を受け、2人の軍人が死亡した。午前11時頃、武装した軍人が北里村にやってきて銃口を突きつけて、老若男女を問わず村人を北村国民学校に集めた。そのうえで村全体を焼き尽くしてしまった。

運動場では、軍や警察の家族の者は前に出ろといって運動場西側に分離した。このとき正門の方で銃声があり、一人の母親が赤ん坊を抱いたまま倒れた。腹を空かした赤ん坊が死んだ母親の胸におっぱいをせがんでしがみついた。この光景はあまりに衝撃的であったのだろう。学生たちと一緒に見た、『悲劇の島チェジュ（済州）～「4･3事件」在日コリアンの記憶』（2008年4月27日、NHK教育テレビで放映）というドキュメンタリーのなかで北村里の年配の女性が現場となった旧北村国民学校の運動場に寝ころびながらその時の様子を実演しながら証言する場面があった。また4･3事件を絵で描き続けている姜堯培がこの場面を描いた絵が北村里事件を記憶

25　以下の事件の経緯は、基本的にノブンスンイ 4･3 記念館のパンフレットおよび北村里 4･3 遺族会の碑石文（2007 年陰暦 12 月 19 日）に依拠している。

するために造られた北村ノブンスンイ4·3記念館の展示館入口にかかげられていた。第17図がその絵である。

第17図　姜堯培画「おっぱい」

このあと運動場の住民たちは数10名ずつ連れ出されて、学校近くのタンパッやノブンスンイ、テッチルの畑で銃殺された。この住民虐殺劇は午後5時ころ大隊長の停止命令があるまで続けられ、この一日で住民約350人が犠牲となった。翌日、殺されずに生き残った住民は咸徳里に疎開したが、そこでも数10人が犠牲となった。

北村里ではそれ以前の12月16日にも23人の若者が殺害された。彼らは村が自主的に組織した民保団員であったが、村の東のネンシビルレで虐殺された[26]。その後も近隣の山野や洞窟に隠れていた住民たちも相当数が討伐隊に見つかって殺害されたりもした。また帰順すれば命を保障すると呼びかけるビラに応えて山から降りてきて帰順したもののその後、拷問を受けたり、結局はジョントゥル飛行場（現済州国際飛行場）で集団処刑されたりして死んでいった。こうして北村里では439人の犠牲者を出し

26　1948年12月16日に起きた23人の若者の虐殺について済民日報四・三取材班（1998）では、自首すれば「良民認定」との呼びかけに応えて咸徳里の大隊本部に自首した北村里の若者たちであったと記している（372～375ページ）。なおノブンスンイ4·3記念館のパンフレットでは事件の詳細を記していないが人数は24人とある。武装隊から村を防衛するために組織された民保団員なのになぜ殺害されたのか疑問に思うが、『済州4·3、64周年北村里犠牲者合同慰霊祭』（北村里済州4·3犠牲者北村里遺族会、2012年）という冊子にも「民保団員のうち若者23人」（7ページ）とあるので間違いないのだろう。なお、済民日報四·三取材班（1996）は、この事件の2日後に村の歩哨に立っていた警察後援会長と里長夫婦が武装隊の襲撃で殺害されたことを記している（375ページ）。

た[27]。一つの村での犠牲者としてはもっとも多い。

わたしたちは、10月12日の午後4時頃、ノブンスンイ記念館に到着した。記念館内部には北村里事件についての写真と解説のパネルが展示され、また北村里事件を題材にした玄基榮『順伊おばさん』の初版本、取材のために使用した録音機が展示されていた。4·3事件を語ることが封じられていた時代、この小説は4·3事件の真相をはじめて韓国社会に知らしめることになった。しかし、すでに述べたようにこのことによって玄基榮は治安当局に拘束され、拷問される羽目になった。金所長の説明によると、当初、この記念館は玄基榮記念館として計画されたのだという。しかし、治安当局から受けた拷問のトラウマのため、その後、玄基榮は作品の原稿を処分してしまったのだという。このため彼の手元には記念館に展示すべきような原稿などが残っていなかったということである。

第18図　順伊おばさん記念碑（2012年10月12日撮影）

27　この人数は北村里4·3遺族会の碑石文によるが、慰霊碑の後方の犠牲者刻名碑の裏面には「436位の英霊」という文句がある。また前掲、『済州4·3、64周年北村里犠牲者合同慰霊祭』に犠牲者は、男338人、女141人、計479人とある（8ページ）。その後、不明であった犠牲者数が増えたのだと思われる。犠牲者数が正確に把握できないことに現れているように、4·3事件解明の困難さが窺われる。

『順伊おばさん』はフィクションであるが、北村里事件をモチーフにしている。国民学校の運動場に村の人々が集められ、軍警関係者の家族を選別する場面、乳飲み子の女性が射殺された場面、運動場から人々が50人くらいずつ、何回かに分けられて追い立てられて一斉射撃が加えられたことなどが生々しく描かれている。この作品で、順伊おばさんは、この一斉射撃のなかで、畑のくぼみに倒れ、その上に撃たれた人々が折り重なるように覆い被さったためにかすり傷もなく助かった女性として描かれている。しかし順伊おばさんはこのとき二人の子どもを失う。その後、彼女はその時すでにお腹に宿していた娘を生み、娘を育てて30年間、生きたが、最後にあの事件の現場の畑で自死してしまうという物語である。

記念館の外に「順伊おばさん記念碑」がある。第18図がそれである。重なるように横たわって置かれたいくつもの四角い石は銃撃で倒れた遺体を象徴しているのであろうか。そして人の姿に彫られて横たわる石は順伊おばさんであろうか。碑石には、小説の一節が刻まれている。

> しかし、二人の子供が埋められているその窪み畑は、彼女の宿命であった。深い沼の鬼神にさらわれるように、彼女は髪の毛を掴まえられ、ふたたびその畑に引きずり込まれて行った。そうだ。その死は一ヶ月前の死ではなく、すでに三十年前の時を経た死だった。彼女はその時、すでに死んでいた人間であった。ただ、三十年のその窪み畑で、九九式歩兵銃の銃口から飛び出た弾丸が、三十年の紆余曲折の猶予を送り、いまになって彼女の胸を打ち抜いただけのことだ。[28]

順伊おばさん記念碑から少し歩くと「済州四・三犠牲者北村里冤魂　慰霊碑」が建っている。そしてそのすぐ後方に犠牲者の名前を刻んだ石碑がある。この石碑の裏面に玄基榮が一文を寄せている。その最後の部分はこのような一節で結ばれている。

「436位の英霊たちよ／どうか／新しい光として聖らかに　よみがえっ

28　玄基榮（2001）、70ページ。

てください／わたしたちの村とわたしたちの民族の行く道を／あかるく照らしてください」

第19図　済州四・三犠牲者北村里冤魂　慰霊碑（2012年10月12日撮影）

慰霊碑の後方には海が見える。ここ北村里も海岸沿いの村である。しかし北村里を含む朝天面は昔から文化・教育の先進地域であり、植民地時代には抗日民族運動の指導者を輩出し、解放後は南労党など左派勢力が強い土地柄であった。武装隊と討伐隊の攻防も激しかった[29]。二代目の武装隊長である李徳九は朝天面朝天里の出身で朝天中学院の教師をしていた。朝天面のこうした背景があったため、討伐隊ははじめからこの地域周辺の住民に敵愾心を抱いていた可能性がある。そのため過剰な報復行為に及んだことが考えられる。本稿の最初の部分で犠牲者の数が武装隊による犠牲者１人に対して討伐隊による犠牲者７人の勘定になると述べたが、これはいわば平均値である。北村里事件の場合、２人の軍人が武装隊に襲撃され

29　前掲、文京洙（2008）、127 ～ 128 ページ参照。

て死亡したのに対してその報復で約350人の村人が討伐隊によって犠牲になった。その比は1：175ということになる。数字の上での話しであるが、平均的な討伐隊の報復に比べて25倍ものあまりにも過大な報復であったといえる。

今回は時間が無くて村人たちが集結させられた旧北村国民学校にまで足を伸ばすことができなかったのは残念であった。慰霊碑のある場所から東側（第19図の写真の右手の方向）に現在の北村初等学校の校舎を遠望することができた。

7　右翼団体西北青年会による虐殺：城山浦トジンモク

城山浦トジンモクは、済州島第一の観光地で、世界遺産に認定されている城山日出峰の入口に位置する。城山浦トジンモクからは城山日出峰の全貌を間近に見ることのできる絶好の場所である。10月12日、朝ホテルを出て約1時間、10時過ぎに城山浦トジンモクに到着した。城山日出峰に通ずる道路のすぐ横、海寄りの場所である。

第20図　城山浦トジンモク（2012年10月12日撮影）

トジンモク（터진목）の「トジン」は「割けた」という意味であり、「モク」は「首」のことだが、首のようにくびれた所を指す。城山浦トジンモクは、城山日出峰のある城山里と済州島本島の古城里を結ぶ細いいわば陸橋のようになった地である。1940年代初めまで、潮の満ち干により、トジンモクは海面上に現れたり、隠れたりしていたようで、これにより城山里は陸地とつながったり、離れたりしていた。金所長の話によれば、もともと城山里は島であったという。いまは城山里と済州島本島を結ぶ道がこれとは別にできているが、4·3事件当時、トジンモクが城山里に通ずる唯一の通路であったとのことである[30]。

いまここには「済州4·3　城山邑犠牲者慰霊碑」が建っている。2010年11月に城山邑（4·3当時は城山面）の4·3犠牲者遺族会が建立したということで、まだ真新しい碑である。第20図は慰霊碑を正面から撮った写真である。背景に世界遺産の城山日出峰が見える。城山日出峰は海に生成したオルム（寄生火山）である。わたしたちはトジンモクを見学したあと、海岸沿いを城山日出峰まで歩いてここに登ったのだが、頂上に行くと大きなお鉢状の噴火口を望むことができる。

第21図　城山日出峰からトジンモクを望む（2012年10月12日撮影）

30　オ・スングク（2007）。

好天であったので頂上からの360度のパノラマは絶景である。第21図のように、すぐ下には瑠璃色の海と先ほど見学してきたトジンモクが中央手前に見える。遠くにはまるで古墳（円墳）のようなオルムを多数、見ることができた。一番奥にはうっすらとだが漢拏山の頂上も見える。こんな風光明媚な自然を抱えた城山浦であるが、ここも4·3事件の悲劇を免れることはできなかった。

この城山浦トジンモクをはじめ城山里一帯での虐殺事件は、右翼団体である西北青年会により構成された特別中隊（西青特別中隊と略称）によって引き起こされた。警察や正規の軍隊ではないということが特異な点である。軍服は着ていたが、一部指揮官を除くと階級章もなかったという[31]。

西北青年会（西青）については、すでに簡単には触れていたが、改めて説明しておこう。西青は北朝鮮の共産化を嫌い、38度線以南に逃れてきた人々によって組織された青年団体である。1946年11月30日、鮮于基聖を代表者としてソウルで結成された。彼らは激しい反共主義精神で韓国における左翼活動の妨害の急先鋒に立った。のちに右翼青年団体が大同青年団に統合される動きがあったが、文鳳濟のグループはこれに反対して西青を継承した。彼らは右翼の中でも李承晩を強固に支持して活動した。私設団体にもかかわらず、超法規的な行動が黙認された背後には、最高権力者のバックアップがあったのである[32]。

西青が済州島に最初にやってきたのは、3·1節発砲事件に言及したところで触れたが、この事件の直後である。済州島出身の知事朴景勲に代わって知事に就任した右翼政治家の柳海辰が警護員として7人の西青団員を連

31　済民日報　四・三取材班（2000）、53ページ。いわば私設団体が軍隊として行動することが許されていたということ自体が異常だとしか思えない。

32　西北青年会（西青）の概要については、済民日報　四・三取材班（1994）、356～364ページおよび金ビョンソン（2010）、Naver知識百科における「西北青年会」の項目（http://terms.naver.com/entry.nhn?cid=200000000&docId=1111120&mobile&categoryId=200001674）などを参照。西青の正式名称は、西北青年会だが、西北青年団とも呼び、むしろこちらの方がよく使われているようである。このため本稿でもこれにしたがって、西青団員という言い方をすることがある。

れてきたのである。西青済州島支部が正式に発足するのは、1947年11月2日であるが、それ以前から少なくない数の西青団員が済州島にわたってきて活動していた。彼らは李承晩の写真や太極旗を押し売りしては資金を稼いでいた。これを買わなかったという理由で、後日、報復されることもあった。左翼の疑いをかけられた青年たちは、有無を言わさず捕らえられて、殴りつけられた。そうしておいて、助け出そうとする家族から金品を得るといった、まるでやくざのように横暴の限りを尽くした[33]。すでに述べたが、武装隊の蜂起は、そのビラに表明されているように、警察だけでなく、西青を代表とする右翼青年団の横暴に対する抗争でもあった。済州島における西青の存在は、4·3事件の原因の一つであったといえる。すでに紹介した4·3委員会による真相究明の最終報告書においても「警察・西青の弾圧に対する抵抗と単選・単政反対を掲げて、1948年4月3日、南労党済州島党の武装隊が武装蜂起し」[34]というように、西青が4·3武装蜂起の原因であったことを明示している。

では西青団員たちは済州島にどのくらいの人数が来たのであろうか。これについてだが、西青団員の来島には、以下のように3つの画期があったようである。第一は、3·1節発砲事件から4·3武装蜂起までの期間である。約500～700人程度がやってきて、まさに4·3武装蜂起の原因ともなる横暴を働いていた。第二は、4·3勃発後に趙炳玉警務部長が、西青団長の文鳳濟に要請して約500人が急派され、討伐隊に加わった時期である。そして第三は、麗順事件以後、済州島での焦土化作戦が本格化する1948年11月以降の時期である。この時期には約千人以上の西青団員がやってきて警察官や軍人となって討伐作戦を遂行したと考えられている[35]。

33　済民日報　四・三取材班（1994）、360～361ページ。
34　済州4·3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会）（2003）、536ページ。
35　西青団員の済州島到来の人数については、『済州4·3抗争と西北青年会』というウェブサイト資料を参照した。
http://kin.naver.com/open100/detail.nhn?d1id=11&dirId=111001&docId=411036&qb=7ISc67aB7LKt64WE7ZqM&enc=utf8&section=kin&rank=1&search_sort=0&spq=0&pid=RnZh035Y7u8ssvx2npsssssssstl-278113&sid=UPEY03JvLC8AADx2G5I

城山里にやってきた西青特別中隊は、城山国民学校に駐屯し、この駐屯期間に城山里が属する城山面管内の温平里、蘭山里、水山里だけでなく、旧左面の下道里、終達里など広範囲な周辺地域の住民たちを連行してきた[36]。そして連行した人々を城山国民学校のすぐ前にあった酒造工場附属のジャヤガイモ倉庫に収監し、そこで酷い拷問による取り調べをした。そして連行された人々のほとんどが、城山浦トジンモクや城山日出峰のすぐ下のウムッケトンサン（우뭇개동산）の入り江で殺害された。具体的には、1948年11月28日、旧左面下道里の住民20余人が、逃避者家族（家族の中に行方不明者がいて、武装隊に加わったとみなされた家族）という理由でトジンモクにおいて銃殺された。また1949年1月2日、城山面吾照里の住民30余人がダイナマイトを隠し持っていたという理由でウムッケトンサンにおいて銃殺された。ダイナマイトは旧日本軍が残していったもので魚を捕まえるのに使っていたが、4·3事件が起こってから吾照里の住民が警備用の手榴弾代わりに保有していたものであった。しかし、西青特別中隊はこのことで吾照里住民と武装隊との関連を疑って連行し、結局、処刑してしまったのである[37]。

済民日報四・三取材班（2000）『済州島四・三事件　第5巻・焦土化作戦（下）』（新幹社、2000年）には城山面で西青特別中隊による蛮行が、数々の証言を交えて紹介されている。現地で金所長も言っていたが、言葉にすることが憚れるような非人間的な行為を平然としたのである。ここでは城山里の大同青年団長だった高成重氏の証言の一部だけを引用しておこう。彼

36　西青特別中隊の規模については資料により異なる。オ・スングク（2007）では50名余、済州4·3研究所（2011a）では100余名となっていて、正確なところは分からないようである。駐屯期間は、ほぼどの資料も3カ月程度としているが、いつからいつまでかははっきりしていない。恐らく、本文で述べるトジンモクやウムッケトンサンでの殺害事件の期間をはさむ、1948年11月過ぎから1949年初め頃ではないかと推察できる。済州4·3研究所（2005）によれば、西青特別中隊は2連隊3大隊の編成で翰林、旧左、城山などに駐屯し、1949年5月15日に撤収したとある（17ページ）。

37　トジンモクの犠牲については、前掲、オ・スングク（2007）、ウムッケトンサンの犠牲については、金チャンチブ（2007）を参照。

はこう語っている。「西青は本当にひどい連中でした。なにしろ、住民を保護するために警察が一時住民を収監したほどですから。酒造工場の倉庫付近には婦女子と青年たちの悲鳴が絶えませんでした。」この証言を取り上げたあと、取材班の著者は、「西青のこれらの行状は、人間がいったいどこまで残酷になれるのかを示す研究対象となるものである。」とコメントしている[38]。

西青特別中隊が駐屯したという旧城山国民学校だが、学校は別の場所に移ったが、その校舎跡はいまも残っているようである。「ようである」と書いたのは、海外FW出発前の事前学習で参考にし、本稿で利用した済州4·3研究所『4·3の道を歩く　済州4·3遺跡143選』でこの場所が紹介されているし[39]、ネットで調べると写真を見ることができる。今回の海外FWでは残念ながらここを訪れることができなかった。写真を見ると、長い年月、風雨にさらされたためか、半ば廃墟となっていて不気味な感じがする。

ところで、民間人である西青団員が何故、ここまで残忍な行為をなしえたのか。これを探っているときに興味深い事実に出くわした。それは済州島のキリスト教プロテスタント人口比率が少ないという事実である。この事実と西青とが関連しているというのである。

周知のように韓国はキリスト教が成長した国である。人口のほぼ20％がプロテスタントキリスト教徒だと言われる。プロテスタントとカトリックを合わせれば、25 ～ 30％になるといわれる。その点でアジアの中で特異な国である[40]。このキリスト教が非常に盛んな韓国において済州島はとくにプロテスタント宣教において「不毛の地」とされている[41]。済州島で何故、

38　済民日報四・三取材班（2000）、60ページ。
39　済州4·3研究所（2011a）、86ページ。ここには、以下のような説明文が載せられている。「城山国民学校には当時100余人程度の西青特別中隊が約3ケ月程度駐屯していた。いまもここを記憶する住民たちは毎日のように拷問に耐えられず張り上げる悲鳴と刑場に引き立てられていく住民たちの姿を生々しく思い浮かぶと証言している。」
40　韓国におけるキリスト教の発展については、倉持和雄（2007）を参照されたい。
41　イム・ヨングアン氏のブログである「西北青年団と済州4·3抗争」（2011年9

キリスト教宣教がつまずいているのかといえば、それは4·3事件当時の西青の残虐行為の記憶が残っているからだという。

西青についてすでに述べたように、彼らは北朝鮮を逃れてやってきた青年たちであるが、北朝鮮から逃れた青年たちのなかには共産化の過程で弾圧されたプロテスタント青年たちが多く含まれていた。植民地時代、平壌は「東洋のエルサレム」と称され、朝鮮半島全域でもっともプロテスタントが盛んな地域であった。西青は主としてこの地域の青年たちによって構成されていたのである。事実、西青の中心勢力になったのは、のちに韓国でもっとも成長した教会の一つである永楽教会の青年たちであったという。永楽教会は新義州からソウルに逃れてきた韓景職牧師によって創設され、北朝鮮から逃れた信徒たちが集まって急成長した教会である。西青と永楽教会との密接な関係について韓景職牧師自身が、「その頃、『西北青年会』をわが永楽教会の青年たちが中心となって組織し、その青年たちが済州島反乱事件を平定した」と吐露している[42]。西青自体は教会の組織ではないし、団員がすべてキリスト（とくにプロテスタント）教徒であったのではないが、西青とプロテスタントとの関係が濃厚にあったことは疑いようのない事実である。このことを踏まえると済州島で悪行の限りを尽くした西青の故に、プロテスタント宣教がうまくいかないという説明は確かに納得がいく。

さて当初の問題関心に戻るが、西青が非人間的な残虐行為をどうしてなしえたのか、これについてヤン・ボンチョル氏は、それが「より内面的な意識、すなわち宗教的信仰からわきでてくるからではないか？」との仮説にもとづいて西青とプロテスタントとの関係性を検討している。そのなかでとくに越南した青年たちに大きな影響力を持った韓景職牧師の思想（共

月6日、http://blog.daum.net/bluenote100/4107745）という記事において済州島がキリスト教宣教において「荒涼とした砂漠」として紹介されている。プロテスタントの全国平均人口比率20％に対して済州島は8％程度で韓国の中でもっとも低い地域に属する。日本との比較（日本はカトリックとプロテスタントを合わせて1％程度）でいえば、8％でも決して低いとは言えないが、韓国の他の地域に比較すれば確かに低い。

42　ヤン・ボンチョル（2010）、218ページ。

産主義や唯物主義への立場)、政治・社会認識（10月抗争や済州島の認識）を検討している[43]。韓景職牧師は共産主義について、何よりも唯物主義である点でキリスト教信仰に敵対するものと認識し、命をかけて戦うべき敵だと主張する。また共産主義は階級意識だけで民族意識がないと批判する。済州島については、直接的な主張は見られないが、当時のキリスト教界が済州島を巫俗や迷信が盛んであり、また共産化した島だという認識を一般的に持っていたと指摘している[44]。

絶大な指導力と影響力を持った韓景職牧師の感化を受けた青年たちは、当然、韓景職牧師と同様の思想的立場と社会認識を身につけたであろうと想像できる。とりわけ唯物主義である共産主義は、命をかけても戦うべき相手であるという意識、あるいは信念を強く持ったかも知れない。とくに南に逃れてくる前に、共産党から弾圧を直接体験した青年たちの場合、共産主義絶滅を使命とさえ考える者もいたであろう。

宗教的な信念による行動は、熱狂的で、ときに非理性的である。冷静になって理性的に考えれば、異常で非人間的であると分かっても宗教的信念にもとづく行動の場合、そのように考えることができなくなってしまう。いやむしろそれこそが正しい行為であると思い込んでしまうのである。キリスト教の概念でいえば、もし対象を神に敵対するサタンとみなせば、もはや、その相手を同じ人間として見ることができなくなり、想像を絶する残虐行為を平気でなしてしまうとことがありえる。こういうことは、中世の魔女狩りで見られたことである。

西青が共産主義者をサタンとみなして彼らに対する残虐行為を平然と

43　同上論文。なお同じ雑誌に掲載された金ピョンソン（2010）は、「西北青年団の暴力動機分析」と題しており、西青の暴力性を正面から考察している論文かと期待したのだが、残念ながら西青の青年たちの越南や西北結成の政治・社会・経済的要因、政治権力や支援勢力との関係を示したに過ぎなかった。西青の暴力を許容し、可能とする背景と構造を明らかにしているが、西青の非人間的な暴力性の根源を明らかにしてはいない。むしろヤン・ボンチョル論文の方が、この問題の解明により接近しているように思う。

44　ヤン・ボンチョル（2010)、244 ～ 252 ページ。

行ったとする解釈はなるほどと思うところがある。その一方で、大きな疑問もわく。というのも、キリスト教は、「愛」を説き、敵に対する「寛容」を説く。そうしたキリスト教倫理観から非人間的な暴力を疑問視することはなかったのか、非常な疑問である。

もう一つは、西青の中央での成立にあってプロテスタントとの関係が濃厚であったことはすでに述べたように否定できない。しかし、済州島にやってきた西青団員とプロテスタントとの関係について実はまだはっきりしていない。この点についてヤン・ボンチョル氏は、「しかし、済州島平定と関連して中央と現地で活躍したキリスト教徒について具体的な人的事項や彼らの具体的な活動事項について分かっていることがほとんどない。この点がこの論考の限界点であると言える。」[45]と述べている。

西青にはキリスト教徒ではない、やくざまがいの輩も加わっていた可能性がある。暴力行為を主導したのは、こうした非キリスト教徒であったかもしれない。しかし、もしそうだったとしても、だからといって西青と非常に関係のあった永楽教会などプロテスタント教会がそれを口実に歴史的責任を逃れることはできないだろう。キリストが説いた「敵をも愛せ」とする「愛」によって何故、そうした暴力を制動できなかったのか、やはり問われていると思う。この点についての韓国プロテスタント教会の反省と謝罪、キリスト教的な言い方をすれば、悔い改めなくして4·3事件で西青により犠牲になった人々とその家族にキリスト教を受け入れてもらうことは困難のように思われる[46]。

45　同上、256ページ。例えば、西青済州団長の金在能については、西青道総務局長金斗鉉を暴行して死に至らしめたり、脅迫によって済州新報を強制接収したりして悪名を馳せたことは知られているが（済民日報四・三取材班（1998)、134～149ページ)、彼とプロテスタントの関係がどうであったのかなどは明らかにされていない。

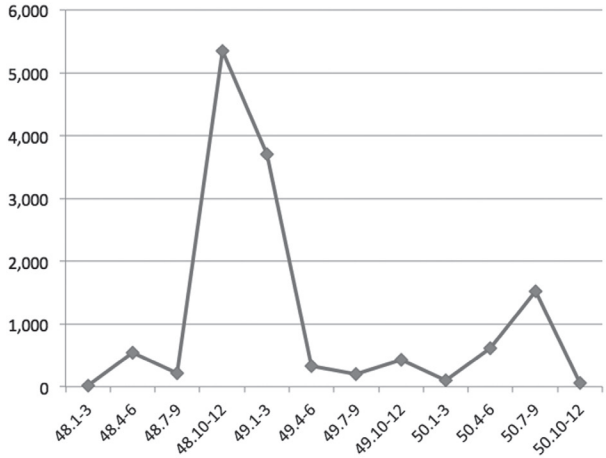
46　ヤン・ボンチョル氏は「韓景職牧師は懺悔し被害遺族と済州島民に謝罪し、赦しを求めなければならない。」（同上、256ページ）と述べているが、わたしも同感である。わたし自身、実はプロテスタント教徒であるが、この事実を知ってたいへん心が痛む。すでに亡くなった韓景職牧師自身による謝罪は不可能であるが、彼を継承したしかるべき人物、組織がこれに代わって謝罪をする必要があるだろうと思う。とくに永楽教会はこの問題を真剣に受けとめる必要があるように思う。

８　朝鮮戦争時の予備検束による虐殺：ソダルオルムと百祖一孫之地、済州飛行場

4･3事件の期間中、犠牲者が集中しているのは、すでに述べたように焦土化作戦が繰り広げられた期間である。時期別の犠牲者数については、５節の前半部分に掲載した第３表で示したが、これを改めてグラフにしてみると第22図のようになる。焦土化作戦がもっとも激しく行われた期間を含む1948年10月～1949年3月が犠牲者のピークをなしていることが分かる。本稿の５～７節でこれまで記述した失われた村、北村里虐殺、城山里トジンモク虐殺などの事件はすべてこの時期のものであった。

ところで第22図のグラフを見ると、これに次いでもう一つのピークをなしているのが、1950年7月～9月の時期である。この時期の犠牲者数は全期間の11.2％をしめる。さてこの時期は、ちょうど朝鮮戦争勃発直後にあたる時期である。

第22図　4･3事件の犠牲者数の時期別推移



出所：済州島四・三事件を考える会編『済州島四・三事件　記憶と真実』（新幹社、2010年）

注：4･3委員会による2000～2007年の審査の結果の数字である。
ここでは、3ケ月ごとの数字が示されている1948年1月～1950年12月までを示した。これ以外の期間の犠牲者数はこの期間に比べると非常に少ない。

4·3事件は犠牲者の数から見て、1949年6月以降、実際には終息したといってもよい状況であった。その画期となるのは1949年6月7日、討伐隊によって武装隊長李徳九が射殺されたことである。文京洙氏は「武装蜂起としての四・三事件は、その死によって事実上終止符が打たれたといってもよい。」と述べている[47]。すでに本稿で触れたように、李徳九の遺体は見せしめとして、十字架にかけられて観徳亭前に晒された。これを見て人々は武装隊の活動の終わりを感じただろうし、残った武装隊員も意気消沈したに違いない。第22図からも1949年6月以後、犠牲者が急減していることが分かる。

1949年6月以降、それまで狂風のように吹き荒れた焦土化作戦の難を逃れた済州島の人々はほっとしたことであろう。以前に比べれば平穏な日常的な生活を少しずつ取り戻していったと思われる[48]。ところが1950年6月25日、北朝鮮の先制攻撃で朝鮮戦争が勃発した。済州島は朝鮮戦争の戦場からはもっとも遠く、結局、ここが戦場になることはなかったのだが、朝鮮戦争の勃発は済州島社会を再び大きく揺るがすことになったのである。開戦後3日にしてソウルが陥落し、以後3カ月間は、北朝鮮の圧倒的な優位で戦局が展開した。韓国政府は釜山に追い詰められ、釜山からも追い落とされる危機に直面した。このような開戦直後の状況で、韓国政府は北朝鮮の侵攻に国内の共産主義者、左翼勢力が呼応することを恐れた。そこでかつて左翼活動の経歴を持ったような人々を警戒して、実際に何か行動を

47　文京洙（2008）、143ページ。

48　といっても武装隊の襲撃から防御するため村は、いわゆる4·3城とよばれる石壁で囲まれ、村人は村の出入りも制限され、非常に不自由な生活を強いられていた。4·3城は3～5メートルの高さ、厚みは基部で2メートル、上部で1メートルの頑丈なものであった。たいてい4カ所の門があって村人は、出入りを制限された。何カ所か望楼が設けられ、村人は交替で歩哨に立たねばならなかった。4·3後、石壁は解体されて、家屋や畑の石垣に利用され、こんにち4·3城はほとんど残っていない。残っていても石壁のごく一部である。そんななかで洛善洞では4·3城を復元して見学できるようにしている。10月13日の最終日にわたしはここを見学することができた。ただ洛善洞4·3城について済州4·3研究所（2011a）は、「考証なく整備されたため問題がある」（35ページ）と指摘している。

起こしたわけでもないのに彼らを拘束した。これを予備検束という。

済州島においては、4·3武装蜂起があったために、4·3事件の関連者あるいはそのようにみなされたものが予備検束され、そして多くは処刑されてしまったのである。予備検束者に対する虐殺は、済州島だけでなく、韓国全域で行われた。その代表的なものが左翼転向者団体であった国民保導連盟加入者の予備検束と彼らの集団虐殺である[49]。これによって最小限5万人以上、最大10万人以上が警察と軍人によって虐殺されたと推定されている[50]。済州島における予備検束者の虐殺は、ある意味で朝鮮戦争時の全国的な予備検束者虐殺の一環と捉えることもできるのだが、4·3委員会はこの虐殺も4·3事件の一部として捉えている。本稿では、その事例としてソダルオルムの虐殺と済州飛行場の虐殺を取り上げて見ていくことにしよう。

(1) ソダルオルムと百祖一孫之地

10月11日、失われた村東広里ムドゥンイワを見学した後、旧日本軍が太平洋戦争末期、済州島に築いた陣地の一つであるカマオルムの洞窟陣地、4·28平和会談の九億里国民学校跡地を順に見て回り、お昼の時間となり、摹瑟浦で昼食を食べた。摹瑟浦は済州島の南西端にある古くからの港町である。4·3事件当時、ここに第9連隊本部があったことは、4·28平和会談を取り上げたところですでに触れた。行政区域では大静面（現在は大静邑）に属し、済州島の東西南北におかれた4つの警察署のうち西部地域を管轄する警察署が置かれていた。その意味で済州島西部地域の中心地とも言えるのだが、いまでも小さな地方の町の風情を残している。

ところで、これから述べるソダルオルムで虐殺され、百祖一孫之地に葬られている犠牲者は、この摹瑟浦に予備検束されていた人々である。朝

49　これについては、金東椿（2008）、266～278ページに詳細に記している。なお金東椿は朝鮮戦争時の虐殺を①作戦としての虐殺、②処刑としての虐殺、③報復としての虐殺に類型化し、予備検束による虐殺を②の一つとして把握している。

50　徐仲錫（2008）、35ページ。

鮮戦争勃発後、韓国政府はいち早く、「全国要視察人の取締および全国刑務所警備の件」（6月25日）、「不純分子拘束の件」（6月29日）、「不純分子処理の件」（6月30日）を全国に通達した。これに従って、摹瑟浦警察署は管轄地域である済州島西部の要視察者として347人を予備検束し、摹瑟浦さつまいも倉庫、武陵支署、翰林漁業倉庫に分散して収容した。予備検束されたのは、4·3関連の遺家族や4·3関連で釈放・訓戒されたりした者、思想が曖昧模糊としている者たちであった。そして彼らを思想傾向によりA～D級に分類し、思想が重患（C級）な者144人、極めて重患（D級）な者108人、計252人を軍に引き渡し、何の裁判も無しに処刑したのである[51]。ソダルオルムで虐殺された人々は、その一部である。

裁判もなく処刑された点でもまったく違法な措置であるが、そもそも予備検束も法的根拠のないものであった。予備検束の通達は、米軍政時代の1945年10月に廃止された日本植民地時代の「朝鮮政治犯拘禁令」に基づくものであった。その意味で予備検束者の処刑は二重の意味で不法だったと言える[52]。

1950年8月20日午前4時頃、摹瑟浦さつまいも倉庫に収容されていた予備検束者たちはトラックに乗せられ、処刑場となるソダルオルムに連れて行かれた。その途中、連行された人々は異常を感じ、自分たちが連行されていく場所を知らせようとしたのか、履いていた靴やベルトなどをはずして道路に投げ捨てた。ソダルオルムは、オルムとしては小規模のもので、植民地時代に日本軍が弾薬庫としていた場所で、のちに米軍がここを爆破して窪地になっていた。連行された予備検束者はこの窪地に立たされ、窪地の上に待機していた海兵隊により銃殺されたのである[53]。

わたしたちは摹瑟浦で昼食後、この現場であるソダルオルムに向かった。もともとソダルオルムの一帯は、日本軍のアルトゥル（알뜨르）飛行場が

51　百祖一孫遺族会（2010）、102～104ページ。
52　同上、103ページおよび167ページ。
53　百祖一孫遺族会（2010）は、虐殺当日、どういう経路で虐殺現場まで連行されていたのか、説明付きの写真を口絵で紹介している（38～47ページ）。

あった場所である。太平洋戦争時、日本から中国の南京に向かう戦闘機はここで給油していく中継地でもあった。現在、飛行場の跡地は、ジャガイモ畑など畑地に変わっているが、コンクリート製の格納庫などが何カ所も残っている（第23図）。格納庫は思ったより小さく、恐らくごく小型の飛行機一台を格納できる程度である。見学した時、ある格納庫には農機具が置かれていた。

第23図　アルトゥル飛行場跡地（2012年10月11日撮影）

ソダルオルムには2007年に建立されたソダルオルム犠牲者追慕碑と犠牲者の刻名碑が正面にある。第24図がその写真である。この碑の向こう側がもと弾薬庫跡であり、窪地になっている。窪地を取り囲むように三面は斜面になっている。金所長の説明によると写真左上の斜面の上（柵が見えるところ）に軍人が銃を構えて整列し、予備検束者を窪地に立たせて射殺したとのことである。

現在、窪地にはステンレス製の柵で囲んだ穴が二つある。碑のあるところに立って窪地に向かうと左側にやや大きい穴がある。こちらが摹瑟浦さ

つまいも倉庫に収容されていた人々が殺害されて埋められた場所である。後に、ソダルオルムからほど近い百祖一孫之地に葬られた人々の犠牲の地である。

ところが、ソダルオルムでの犠牲はこれだけではなかった。同じ日、これに先だって午前2時頃、武陵支署と翰林漁業倉庫に収容された人々もこのソダルオルムで殺害された。やや小さい右側の穴がその人々が犠牲になった所である。さらに実は、1ケ月ほど先立つ7月16日に20人がここですでに処刑されていた[54]。

第24図　ソダルオルム犠牲者追慕碑（2012年10月11日撮影）

では一体、ソダルオルムでの犠牲者総数はどれだけなのだろうか。金所長は、摹瑟浦の132人、武陵と翰林の63人と説明された。そうであれば、7月16日の20人と合わせ総計は215人となる。ソダルオルム導入路の入口にあった案内板には、「摹瑟浦警察署管内で344人を予備検束し管理してきたが、7月16日、63人が軍に引き継がれた後、1次として20人がソダルオルムで虐殺され、2次として8月20日、午前2時に翰林収容者60人余を、

54　ソダルオルム犠牲者の刻名碑裏面の説明文。

午前5時に摹瑟浦収容者130人余など210人余が法的手続きなく集団虐殺され、闇埋葬された」と記しており、数についてはやや曖昧である。北村里のところでも触れたが、犠牲者の正確な数の把握は難しいようである。

さてこのソダルオルムでの集団虐殺は、すぐに人々の知るところとなった。武陵と翰林の収容者の処刑の後、午前4時頃、彼らの遺族約300人が現場に集まってきて、27体の遺体を穴から引き出した。しかし、警察に見つかり、遺体を放置したままにせざるを得なかった[55]。警察や軍は密かに処理しようとしたのだろうが、実はすぐに知れ渡っていたのである。翰林からソダルオルムまでは相当の距離である。暗い早暁の道を遠くから駆けつけ、危険を冒して遺体を収容しようとした翰林の人々の必死な気持ちが伝わってくる。それにしてもその作業は、まさに二つの集団虐殺の合間に行われていたというのも驚きである。しかし、彼らの必死な願いはすぐには実現できなかった。ソダルオルム犠牲者の遺体が収容されるのは、6年近く経た1956年のことである。当時の軍警がここに近づくことを妨げたからである。その間、ソダルオルムの遺族たちは、家族の遺体がそこにあることを知りながらそのままにせざるをえなかった。その思いはいったいどんなであったろうか。6年後、やっと遺族たちの請願が聞かれて遺体が収容されることができた[56]。

1956年3月30日に翰林の犠牲者63人の遺体が収容され、翰林のマンベンディ（만벵듸）共同葬地に埋葬された。つづいて5月17～18日にかけて摹瑟浦の犠牲者の遺体収容作業が行われた。遺体の特徴から区別が可能な17体は縁故者が引き取り、残り個々の遺骨の区別がつかなかった遺骨は、適当に132体に区分し、これを百祖一孫之地に埋葬した[57]。

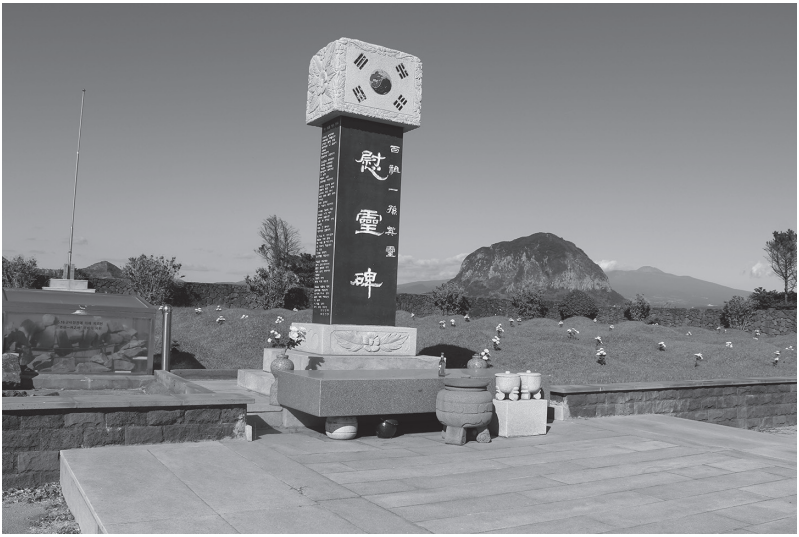
「百祖一孫」とは、「祖先が違う132のおじいさんの子孫たちが、同じ日

55　百祖一孫遺族会（2010）、110ページ。
56　現場での金所長の説明によると、当時、ソダルオルムで遺体を食べた野犬が狂犬病となるといった騒動があって、当局も遺族の遺体収容を認めたとのことであった。狂犬病の話しについては、百祖一孫遺族会（2010）も記述している（111ページ）。
57　同上、111ページ。このことからすると摹瑟浦収容者の犠牲者は149人とも考え

の同じ時間、同じ場所で死に、骨が固まって一つになったのだから、一つの子孫だ」という意味である[58]。百祖一孫之地は、ソダルオルムからほど近い場所にある。

第25図が百祖一孫之地の写真である。「百祖一孫英霊慰霊碑」と記した碑を中央にしてそのすぐ後ろが墓域となっている。いわゆる土饅頭型の伝統的な墓である。この日は朝から好天であったが、午後からますます晴れ上がり、百祖一孫之地からこの地域でもっとも標高があって目立つ山房山を間近に、また、その背後には韓国の最高峰漢拏山を遠くだが、綺麗に見ることができた。漢拏山の頂上まですっきり見える日は数えるほどでしかないとのことであったので非常に幸運であった。百祖一孫之地の背景は、

第25図　百祖一孫之地（2012年10月11日撮影）



られる。また 1962 年頃、ここでくず鉄収集をしていた人夫が、遺体 2 体を発見し、近くに埋葬したとの証言があり、これにもとづいてのちに周辺何カ所かで遺体の再発掘作業が行われたが、発見できなかったという（同、111 ページ）。こうしたことを勘案するとソダルオルム犠牲者の正確な数はますます分からなくなる。

58　百祖一孫之地の案内板による。

しばらく眺めていたいような景勝地であった。

ソダルオルムの犠牲から6年、やっと百祖一孫之地に犠牲者を埋葬し、遺族としてはこれまで背負ってきた重荷を少しは軽くすることができただろうと思う。しかし遺族たちはその後も平穏ではいられなかった。

1960年4月の学生革命で李承晩政権が倒壊し、民主化気運が高揚するなかで朝鮮戦争時の良民虐殺の真相解明と名誉回復の動きがあり、百祖一孫の遺族達も名誉回復を求めて請願運動をした。しかし、翌1961年5月、朴正熙の軍事クーデターで軍事政権が登場すると空気は一変した。軍事クーデターのちょうど1ト月後の6月15日、西帰浦警察署長の指示で百祖一孫之地の碑石は粉々に破壊され、遺族たちに共同墓地の解体と移葬の圧力がかけられた。この圧力により一部の遺族は移葬せざるをえなかった。しかし、当時の遺族代表人の李ソンチョル氏が尽力して碑石の破壊だけで事を収めることができた。粉々にされた碑の石片は、土中に埋められてしまった[59]。

この事件については、本稿の最初の部分で触れたが、長い反共政権のもとにあった韓国において4·3事件がタブー視されていたことを象徴する事件であった。たとえ慰霊碑であったとしても4·3事件に少しでも触れることは許されなかったのである。しかし、民主化後、4·3事件の真相究明の気運が高まってきたなかで、遺族たちはこの石片を掘り出し、一つずつ集めて、1999年8月、「碑石毀損事件経緯」を記して慰霊碑の横に展示した[60]。

第25図写真の慰霊碑左側に四角い透明の箱に入れられているのが、当初の慰霊碑の石片である。この石片の展示は、過去に韓国政府当局が、4·3事件を歴史から抹消しようとしていたことの証拠物として貴重な史料だと言えよう。ソダルオルム犠牲者の遺族たちは、このように何重もの苦しみを味あわされたのである[61]。

59　以上の経緯については、百祖一孫遺族会（2010）、117 ～ 118 ページ。

60　同上、118 ページ。

61　本稿では詳しく述べられなかったが、遺族の多くは「連座制」という苦難も背負わされた。韓国社会で 4·3 関連者という履歴によって就学や就職において差別を被ったのである。

（2）済州飛行場

済州飛行場、もともとの名前はジョントゥル（정뜨르）飛行場、現在の済州国際空港である。済州島を訪れる観光客の玄関口である。ここは1948年12月末から翌年3月末まで地域の住民を連行して射殺した場所であり、また1949年10月には軍事裁判によって249人を処刑した場所でもあった。そして朝鮮戦争時には予備検束者の処刑地であった[62]。だからこの地は予備検束者の虐殺だけではなく、4·3事件期間中、繰り返し虐殺が行われた場所である。

北村里は一つの村の住民がしかもたった一日で大量に虐殺されたという点で最大の虐殺地と呼ばれる。一方、済州飛行場は犠牲者が各地の住民であり、また虐殺も数次にわたるものであったが、犠牲者の総数という点でいえば、ここも最大の虐殺地であった。いまは滑走路となっている部分やその周辺にはいまだに多数の犠牲者の遺骨が埋められたままになっている。

4·3特別法の後続措置で、政府の過去清算プログラムの一環として2006年から4·3犠牲者の遺骨発掘事業が取り組まれた。第一段階は、2006年～2007年の済州市禾北地域5カ所での発掘事業、第二段階は2007年～2009年の済州国際空港内2カ所での発掘事業、そして第三段階は2010年、西帰浦市南原邑泰興里の発掘事業である[63]。このうち、済州国際空港遺骨発掘事業の概要を示せば、第5表の通りである。

62　済州4·3研究所（2011a）、17ページ。

63　これら調査結果については、済州4·3研究所（2008）、同（2011b）、同（2011c）を参照せよ。なお禾北地域一帯の発掘地は、私たちが見学した「失われた村コヌル洞」の近くである。

第５表　済州国際空港遺骨発掘事業結果の概要

発掘場所	発掘期間	遺　骸	遺留品	遺骸鑑識結果	
済州国際空港１	2007.8.21 ～ 2007.12.15	完全遺骸54体、部分1,000余点	659点	123体 個体確認	21体 身元確認
済州国際空港２	2008.9.9 ～ 2009.6.10	完全遺骸259体	1,311点	260体 個体確認	48体 身元確認

出所：済州4･3研究所／済州大学校『4･3犠牲者遺骸発掘写真資料集２ ジョントゥル飛行場発掘１次』、済州島特別自治道、2011年

禾北地域の発掘調査で発掘された遺骸は全部で8体（うち頭蓋骨を残す完全遺骸は7体）に過ぎなかったが、済州飛行場での発掘では大量の遺骸がつぎつぎに見つかった。発掘現場は、南北に走る滑走路のほぼ北端の滑走路を挟む東西二カ所である。第1次に西側、第2次に東側の順で発掘作業が進められた。このうち西側は予備検束犠牲者、東側は軍事裁判関連犠牲者が埋葬されていることが分かった 。

10月10日の午前中、わたしたちは金昌厚4･3研究所長から「4･3と平和･人権の道」と題して、レクチュアーを受けたが、その冒頭で済州飛行場の第2次発掘事業の記録映像を見た。発掘作業は考古学の発掘のように多くの人々による手作業で行われた。考古学の発掘と異なり、発掘対象が遺跡物ではなく、4･3事件犠牲者の遺体であるだけに作業にたいへん神経を使っていたことがうかがえた 。

すぐ前のところで述べたソダルオルムにおいて遺体の収容は、虐殺事件の6年後であったが、発掘したとき、それぞれの遺骨はくっついてしまって一人一人の遺骨を区別することがほとんどできなかった。しかし、済州島飛行場の発掘では、約60年後の発掘であったが、完全遺骸をつぎつぎに発掘していくことができた。第1次の発掘では54体、第2次の発掘では259体が完全遺骸であった。とはいえ、何層にも積み重なるようにして埋まっていただけに、完全遺骸のかたちで掘り出すことは非常に骨の折れる作業であったに違いない。そのことは発掘作業の映像や写真資料から容易

に想像できた。

そうした遺骸のなかに、後ろ手にした姿の遺骸もあった。後ろ手に縛られたままで処刑されたのだろう。またなかには顔を手で覆ってしゃがみこんだような姿の遺骸も見られた。処刑の瞬間、恐怖の余り、そうしたのかも知れない[66]。

遺骸と共に多数の遺留品も発掘されている。靴、めがね、ボタン、櫛、バンドのバックル、財布の金具部分、印鑑などである。これらは犠牲者の所持品であったと思われる。発見された二つの印鑑には氏名が鮮明に残っていて犠牲者を特定することを可能にした[67]。この印鑑の発掘に関連して以下のような記事があった。

> 弟は兄の痕跡を探して行ってみないところはなかった。昔の西帰浦収容所、虐殺場所、さらには対馬まで。2007年11月12日、印鑑が発掘された。長い歳月、土の中に埋められていたが、名前が鮮明に残っていた。兄は60年の長い歳月を経てこうして再び戻ってきた。[68]

この文章のなかに、なぜ「対馬」のことが出てくるのかというと、4·3事件のとき海に捨てられた遺体が一部、対馬に流れ着いたからである。その事実について今回の海外ＦＷで金所長から聞いてはじめて知った[69]。

また遺留品とともに、多数の弾丸の破片も一緒に発掘されたが、射殺時に発砲された銃弾だと考えられる。

発掘作業後、発掘現場は埋め直されて原状に復された。発掘現場は済州飛行場内であるため現在、現場に立ち入ることはできない。10日の午後、金所長のレクチュアーを受けた後、わたしたちは済州飛行場の北側を走る海岸沿いの道路を経て、発掘現場からほど近い海岸に設置された展望台に

66　済州4·3研究所（2011b）、25ページの写真。

67　一つは「梁奉錫」、もう一つは「熙銓」という木製の印鑑である。犠牲者名簿と照合して前者は南元面、後者は大静面出身者であることが分かった（済州島4·3研究所／金昌厚（2010）、18ページ）。

68　済州平和財団（2012）、52ページ。

69　これについて詳しくは、済州島4·3研究所／金昌厚（2010）を参照されたい。

行き、そこから遠望しただけである。なお発掘された遺骨は、平和公園内に造成された発掘遺骸奉安所に安置されている。わたしたちは、済州飛行場の発掘現場を遠望した後、平和公園に行き、遺骨奉安所も訪問することができた。

ところでこの発掘事業の目的はたんに遺骨を発掘するだけではない。発掘された遺骨の身元を可能な限り調査することも目的であった。そのためにDNA鑑識という最新の科学技術が利用された。発掘作業と並行して4·3事件犠牲者の遺族に採血への協力が呼びかけられた。そしてその結果、なんと多数の身元を確認することができたのである。発掘した遺体のDNA鑑識により身元が確認できたという出来事は、恐らく済州島が世界でもはじめてだろうと金所長は強調していた。済州飛行場の発掘も含めて、2006年～2010年まで行われた発掘事業で発掘された遺骨は396体、うち身元が確認できた遺骨は71体である[70]。

済州飛行場の第1次発掘は、すでに述べたように予備検束で殺害された犠牲者たちである。ここでは123体の遺骨（うち完全遺骸54体）が確認され、そのうち身元を確認できたのは21体であった。当初、済州飛行場で殺害された予備検束者は、済州近辺の人々であろうと考えられていた。しかしDNA鑑識によって判明した身元は、21人のうち15人が西帰浦警察署の予備検束者、6人が摹瑟浦警察署の予備検束者であった。西帰浦地域の人々は、予備検束者の多くが西帰浦近くで水葬（海上で殺害し、遺体をそのまま海に遺棄）されたとばかり思っていたので意外な結果に驚くことになった。どういう経緯であるか不明だが、済州邑からずいぶん遠い地域で予備検束された人々が、わざわざ済州飛行場まで連れてこられて処刑されていたということが分かったのである。金所長によると、当初、西帰浦地域の人々はDNA検査のための採血にあまり応じていなかったという。しかし、済州飛行場の第1次発掘の鑑識結果をきっかけとして、以後、西帰浦の人々が多数、採血することになったという。

70　済州平和公園内発掘遺骨奉安所の案内文による。

DNA鑑識結果で身元が分かった人々は意外にもすべて済州近辺の人々ではなかった。しかし、済州近辺で予備検束された人々が済州飛行場で処刑されたという目撃証言が多くある。このため済州飛行場の別の場所に間違いなく、それらの人々の遺体が埋められているはずだと考えられている。その場所として有力視されているのは、これまで行われた二つの発掘場所の間である。しかしそこはまさに南北滑走路の地点にあたる。そうだとすると、これまでの滑走路拡張工事の際にすでに毀損されていることが考えられる[71]。済州飛行場における新たな発掘事業が早急に必要だと主張されているが[72]、政権が李明博政権になって4·3事件真相究明のための後続事業は停滞気味である。今年になって政権は朴槿恵政権に交替したが、基本的に保守政権であるためにあまり期待はできそうにもない。また、滑走路地点での発掘作業となると空港事業そのものに大きな支障をもたらす可能性もある。それだけに済州飛行場での新たな発掘事業はかなり困難であるように思われる。

おわりに

済州島における海外FWを実現できたことで、済州島4·3事件について深く考える機会が与えられた。何よりも現場を探査することで、事件を生々しく感ずることができた。訪問前の学びと現地での学び、そして訪問後の学びで、4·3事件の実相を詳細に知ることができた。そうした学びの成果の一端を本稿によってどの程度、伝えられたであろうか。帰国後、改めて学びながら、現地でもっと確認したかったことに気づいたし、まだまだ学び足りないことも多い。しかし、海外FWの成果として本稿の読者に4·3事件がどういうものであるか、まずは関心をもってもらい、さらにより詳しく知ってもらいたいと思う。

金昌厚所長が別れ際に、わたしたちに熱く語ったことは、こうした悲惨

71　済州4·3研究所（2011c）、126～127ページ。
72　同上、238ページ

な事件は二度と繰り返してはいけない、そのためにも4·3事件のことを語り継いで欲しいということであった。わたしが本稿を書いたのも金所長の熱い思いに少しでも応えたいと思ったからである。

では4·3事件のような悲惨な事件を繰り返さないために4·3事件を学んで言えることはなんだろうか。人によりいろいろあるだろうが、わたしは二つのことを指摘したい。

第一は、対立するイデオロギーの問題である。4·3事件においていえば、「共産主義」と「反共主義」の対立である。この両者は確かに両立しがたい。しかし絶対に両立しないわけではない。実際にこれらのイデオロギーを持つ人々の考えには幅がある。すべての人を「共産主義」と「反共主義」のどちらかに截然と分けることなどそもそもできない。しかし、4·3事件の悲劇の原因は、「共産主義」を否定し、その存在を許容しなかったことにある。人々の考えにいろいろ幅があるにもかかわらず、人々を「共産主義」か「反共主義」かのどちらかに区分けした。そして何らかの理由で「共産主義」とみなされればその人の存在も否定されることになった。こうした状況は、その後、韓国の軍事政権下でも継承された。4·3の悲劇は繰り返されていたのである[73]。

では悲劇を繰り返さないためにどうすべきか、もういうまでもないことだろう。それは対立するイデオロギーの存在を許容するということである。たんに考えが違うという程度でなく、自分のイデオロギーを否定するかのようなイデオロギーであったとしてもその存立を許容するということでなければならない。もちろん、それによって、ある場合に、政治的、社会的混乱がありうる。対立するものと相対峙する時、快いものでもない。しかし、

73　韓国が何故、そうなったか、一言で説明することは難しいが、冷戦下の分断国家化が大きな原因だと言える。朝鮮半島の統一政府樹立を諦め、南での韓国の樹立は、北での北朝鮮の樹立を結果として許容することになった。北がソ連の影響下で「共産主義」化しただけに、「共産主義」は韓国の存立にとって現実的な脅威となった。韓国は、分断国家の一方に共産主義を許容した結果、韓国内部に対しては共産主義を完全に否定せざるを得なくなったのである。

対立し合ってもその存在までは否定しないという前提がある限り、4·3の悲劇は起こらないであろう。

第二は、暴力の問題である。4·3事件ではあまりにも多くの暴力があった。暴力は人々を物理的に傷つけるだけではなく、心に大きな傷を残す。暴力は報復によって拡大する。暴力の連鎖である。これが4·3事件の悲劇の中身である。

ところで国家と市民の保有する暴力の規模は比較にならない。国家は警察力と軍事力という圧倒的に強大な暴力装置を保有している。だからこそ国家は暴力の使用に自制的でなければならないはずである。しかし4·3事件ではあまりにも安易に国家の暴力が用いられた。その原因は第一に指摘した相対立するイデオロギーを許容しないという問題と関連している。許容できないイデオロギーを排除しようとする場合、そのもっとも安易な方法は暴力によって排除することだからである。

それゆえ4·3の悲劇を繰り返さないために暴力は絶対に制限しなければならない。何よりもまず国家権力はこの点で常に自制の努力を最大限すべきである。

では武装隊の武装蜂起はどう考えるべきか？圧倒的な物理力を持つ国家権力が市民に暴力を加え続ける時、これに抵抗するための市民の暴力は許されるか、という問題である。これに対する最終的結論は保留としたいが、いま、わたしは市民の側も暴力の使用による抵抗を避けるべきだと考えている。その理由は第一に、国家権力のより大きな報復の暴力を招くからであり、第二に暴力では巨大な物理力の国家に対して所詮勝ち目はないからである。そして何よりも暴力の連鎖は、心を傷つける人々を多数生み出す結果になるからである。

済州島4·3事件の悲劇を繰り返さないため、異なるイデオロギーとりわけ対立するイデオロギーの存在を許容し、いかに対立してもけっして暴力を用いないことが重要だと思う。それは一人一人の市民がそう考え、そして国家がそれを制度的に保障し、守らなければならないことだと思う。以

上述べたことは、こんにちの人権意識からすれば、ごく当たり前のことを言っているに過ぎないように思う。しかし、人はどうも過ちを繰り返す。だから4·3事件のように実際にあった歴史を語り継ぐ必要がある。

参考文献

【日本語文献】）（日本語読みで50音順）

許榮善（2006）『済州四・三＜日本語版＞』、民主化運動記念事業会、2006年

金石範・金時鐘（2001）『なぜ書きつづけてきたか　なぜ沈黙してきたか　済州島四・三事件の記憶と文学』、平凡社、2001年

金東椿（2008）『朝鮮戦争の社会史　避難・占領・虐殺』、平凡社、2008年

倉持和雄（2007）「韓国キリスト教の歴史と特質についての考察」、『横浜市立大学論叢・人文科学系列』第58巻第1·2号、2007年3月

玄基榮（2001）『順伊おばさん』（金石範訳）、新幹社、2001年

玄基榮（2002）『地上に匙ひとつ』、平凡社、2002年

済民日報　四・三取材班（1994）『済州島四・三事件　第１巻・朝鮮解放から四・三前夜まで』、新幹社、1994年

済民日報　四・三取材班（1995）『済州島四・三事件　第２巻・四・三蜂起から単独選挙まで』、新幹社、1995年

済民日報四・三取材班（1996）『済州島四・三事件　第３巻・流血惨事への前哨戦』、新幹社、1996年

済民日報四·三取材班（1998）『済州島四·三事件　第４巻·焦土化作戦（上）』、新幹社、1998年

済民日報四·三取材班（2000）『済州島四·三事件　第５巻·焦土化作戦（下）』、新幹社、2000年

済州島四・三事件を考える会・東京編（2010）『済州島四・三事件　記憶と真実』、新幹社、2010年

徐仲錫（2008）『韓国現代史60年』、明石書店、2008年

文京洙（2005a）『韓国現代史』、岩波書店、2005年
文京洙（2005b）『済州島現代史　公共圏の死滅と再生』、新幹社、2005年
文京洙（2008）『済州島四·三事件　「島のくに」の死と再生の物語』、平凡社、2008年

【韓国語文献】（日本語読みで50音順）
金ヨンチョル（2009）『済州4·3事件初期警備隊と武装隊交渉研究』、済州大学校大学院史学科修士論文、2009年
金ピョンソン（2010）「西北青年団の暴力動機分析－済州4·3事件を中心として」、『4·3と歴史』第9・10合併号、済州4·3研究所、2010年
金昌厚（2011）「4·3真相糾明運動50年史に見る4·3の真実」、『4·3と歴史』第11号、済州4·3研究所、2011年
済州4·3研究所（2005）「第12回歴史教室　済州4·3の歴史的真実を求めて」、済州4·3研究所、2005年11月
済州4·3研究所（2008）『4·3犠牲者遺骸発掘写真資料集』、済州島特別自治道、2008年
済州4·3研究所（2011a）『4·3の道を歩く　済州4·3遺跡143選』、4·3平和財団、2011年
済州4·3研究所（2011b）『4·3犠牲者遺骸発掘写真資料集２　ジョントゥル飛行場発掘1次』、済州島特別自治道、2011年
済州4·3研究所（2011c）『4·3虐殺闇埋葬地（南元邑泰興里）　遺骸発掘事業　最終報告書』、済州4·3研究所、2011年
済州島4·3研究所／金昌厚（2010）『対馬に漂流した4·3の魂』、図書出版カク、2010年
済州4·3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会（2003）『済州4·3事件真相報告書』、2003年
済州4·3第50周年学術・文化事業推進委員会編（1998）『済州4·3遺跡地紀行　失われた村を訪ねて』、学民社、1998年

済州4･3平和財団（2010）『済州島4･3　失われた村』、済州4･3平和財団、2010年
済州4･3平和財団（2012）『4･3と平和』第9巻、2012年9月
百祖一孫遺族会（2010）『百祖一孫英霊60年史　ソダルオルムの恨』、百祖一孫遺族会、2010年
ヤン･ボンチョル（2010）「済州4･3と西北キリスト教」、『4･3と歴史』第9･10合併号、済州4･3研究所、2010年

【ウェブサイト資料（韓国語）】
オ・スングク（2007）「4･3遺跡地を訪ねて（5）城山里西北青年団駐屯地」（http://blog.naver.com/yklee43?Redirect=Log&logNo=30037845130）
金チャンチブ（2007）「第14回4･3文学紀行（3）」（http://blog.daum.net/jib17/10075118）
池萬元（2011）「金益烈のミステリー」（http://blog.naver.com/jmw8282?Redirect=Log&logNo=140126286453）
文昌松編（1995）『漢拏山は知っている　埋もれた4･3の真相』、1995年（http://jeju.ex-police.or.kr/resource1_14.php）